

# 学問基礎科目相関図の効果検証

齊 藤 和 也 (経済学部教授)

林 敏 浩 (総合情報センター教授)

佐 藤 慶 太 (大学教育開発センター准教授)

## 1. はじめに

平成 24 年度の「調査研究部共通教育コーディネーター等検討ワーキンググループ」(以下、ワーキンググループとする)において学問基礎科目に関する諸課題について整理されたが(中谷ほか、2013、64 頁)、その一つに、大学に入学したばかりの学生がそれぞれの関心を基礎にして幅広くかつ関連性を持って授業科目を選択するために手助けとなるものを提供することが挙げられた。そこで、ワーキンググループでは、学問分野相互の関係を示すマップ(全体図)を作成し、さらに、各科目領域の幹事の協力を得て、学問分野ごとにカリキュラムマップ(相関図)と概要文を作成し、『平成 25 年度全学共通教育シラバス I』(pp. i - xxiii)に掲載した。

相関図に関する説明は、入学時の共通教育ガイダンスにおいて行われてはいたものの、初年度ということもあって、どの程度浸透しているか不透明であった。そこで、前期及び後期の授業登録実施後の時期に、主に浸透度を調べる目的で、上記相関図とそれに関連した事項についてアンケート調査を実施した。本論は、そのデータに基づいて、相関図を掲載した効果について行った検証作業の報告である<sup>1)</sup>。

## 2. 相関図のねらいとアンケート調査の目的

上記のように、相関図を掲載した目的は、学問基礎科目の各分野における授業科目群から見た他の学問基礎科目及び主題科目との関連性を図示し、加えて、その分野の学問の概要を提示することにより、受講登録時において学生が幅広くかつ関連性を持って授業科目の選択を行えるよう手助けをすることにある。そして、そのような選択の結果、学生各人が全学共通教育の授業において修得した知識を相互に関連づけることができるようになることを期待している。また、授業を提供している科目領域の教員間において、全学共通教育における当該科目領域の位置付けに関して共通の認識を持つための一助になることも期待している。

今回のアンケート調査では、相関図に対する学生の認知度の調査が主眼であるが、これに加えて、カリキュラム改革時に設定された共通教育スタンダードの認知度はどの程度か、また、履修計画を立てる際に学生が相関図をどれだけ役立てているか、さらには、授業相互の関連性に関する学生の認識に相関図がどの程度の関連を持つことが可能なのかを調査することにした。今回の調査の検証結果は、次年度に向けて相関図を更新・改善していく際の重要な参考資料となるであろう。

### 3. 調査の概要

調査対象は、平成25年10月15日（火）の2校時に全学共通科目の学問基礎科目、主題科目を受講している学生である。担当教員の協力のもと授業時間内に調査票を配布し、回収を行った。有効回答者数は819名であった。次節で詳しく見ていくが、アンケートは、相関図の認知度（問1～3）、全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度（問4～7）、履修計画を立てる際の判断基準（問8～10）、専門科目に対する全学共通科目の有用性、授業相互の関連づけ（問11～12）についての問いからなる。

表1は、回答者の学部別割合、学年別割合を示したものである。回答者は、1年生が圧倒的に多いが、元々のターゲットは低学年であるから、アンケートの実施方法は妥当であると言えよう。学部別にみると、医学部と農学部の回答者が少ない。火曜日、農学部の1年生は農学部キャンパスで必修の専門科目を受講している。また医学部医学科の1年生の半数弱が、火曜日3校時から医学部専門科目（自由科目）を受講している。その他の全学共通科目修得済みの1年生は空き日である。このことが、医学部、農学部の回答者が少ない理由であると考えられる。

表1 回答者の割合

学年	1年	2年	3年	4年以上	合計		
	89.5	6.8	2.1	1.6	100.0(819)		
学部	教育	法学	経済	医学	工学	農学	合計
	22.1	19.3	31.0	2.3	25.0	0.2	100.0(819)

注：表中の数値はパーセント、括弧内は回答者数。以下の表も同様。

回答の集計に際して、学部別の分析も行ったが、学部間で意識の相違は見られなかった。そのため次節では、全体の集計結果のみに言及する。

## 4. アンケート結果の分析

### 4-1. 相関図の認知度

アンケートは、相関図の認知度に関する設問から始まっている。具体的には、問1で「今年度から『全学共通科目シラバスI』に全学共通科目相関図が掲載されています。これについて知っていますか。」という問いを立て、これについて「知っており、参考にしている」、「知っているが、参考にしていない」、「知らない」の三択で回答をもとめた。これを踏まえて問2では、「知っている」を選択した回答者を対象に、「全学共通科目相関図をどのように知りましたか」という問いを立て、相関図を知る手だてについて調べている。問3では、「学問基礎科目相互の関連を理解しているか」という質問に、「理解している」、「どちらとも言えない」、「理解していない」の三択で回答を求めた。

問1の回答から、相関図を知っている学生は全体の6割しかいないことがわかる。また問2からわかるように、相関図を知る手だてのうち、最も多いのは学生の自力によるものである。ガイダンス等での情報提供を強化する余地があるといえよう。

問3の回答から読み取れるように、学問基礎科目相互の関連を理解している学生は、非常に少ない。

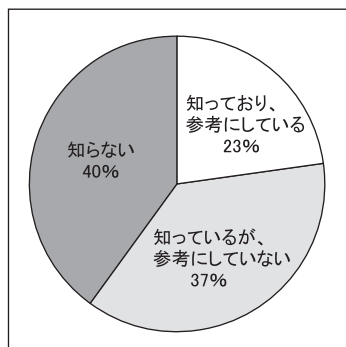


図1 問1の回答  
(相関図の認知度)

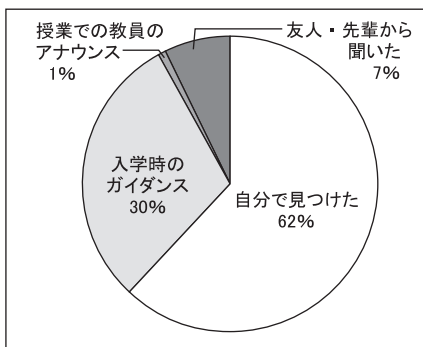


図2 問2の回答  
(相関図を知る手立て)

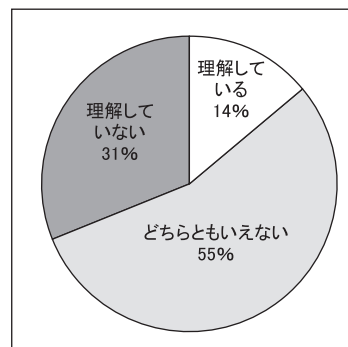


図3 問3の回答  
(学問基礎科目相互の関連の理解)

表2 問1と問3のクロス集計 (「相関図の認知度」と「学問基礎科目相互の関連についての理解」の関係)

問1. 全学共通科目相関図を知っていますか。	問3. 学問基礎科目相互の関連を理解していますか			
	理解している	どちらともいえない	理解していない	合計 (N)
知っており、参考になっている	36.5	57.7	5.8	100.0 (189)
知っているが、参考にしていない	10.6	66.2	23.2	100.0 (302)
知らない	3.8	43.0	53.2	100.0 (316)

また、問1と問3の結果とをクロス集計すると、相関図を参考にしている学生は、学問基礎科目相互の関連を理解している傾向があることが分かる。この点において、相関図の効果を確認することができる。

#### 4-2. 全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度

続く問4～6は、平成23年度から適用されている「全学共通教育スタンダード」(問4)、全学共通教育スタンダードに則して設定された「全学共通教育の到達基準」(問5)、「全学共通教育水準コード」(問6)の認知度を調べるための質問である。それぞれについて「知っているかどうか」を問い、回答は「内容まで知っている」、「あることは知っている」、「全く知らない」の三択とした。さらに問7では、「全学共通科目の各科目群(主題科目、学問基礎科目、大学入門ゼミ等)固有の役割について知っていますか」という問いを立て、「理解している」、「どちらとも言えない」、「理解していない」とい

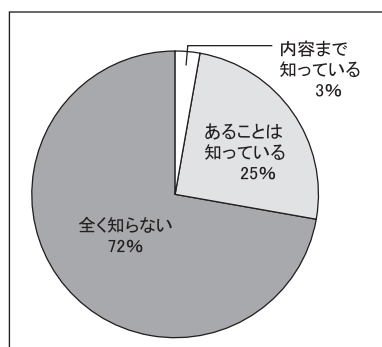


図4 問4の回答  
(スタンダードの認知度)

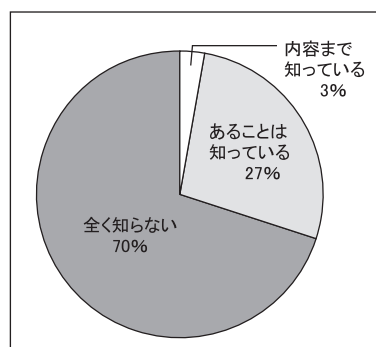


図5 問5の回答  
(到達基準の認知度)

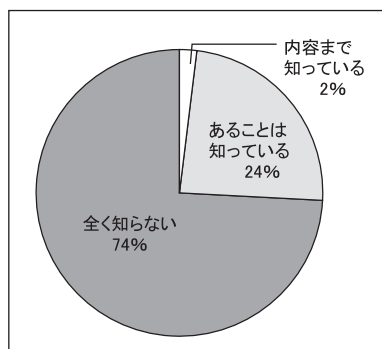


図6 問6の回答  
(水準コードの認知度)

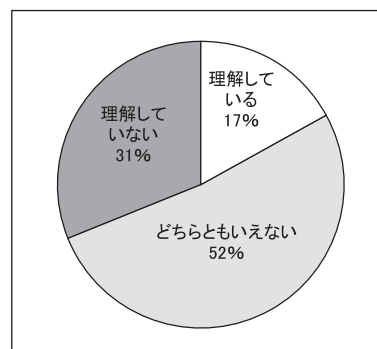


図7 問7の回答  
(各科目群の役割の認知度)

う三択で回答を求めた。

問4～7より、全学共通教育スタンダード及び関連項目の認知度が低いことが分かる。スタンダード、到達基準、水準コードのすべてにおいて、内容まで知っている学生は2～3%程度しかいない。その存在を知っている学生とあわせても、認知度は、全体の3割弱程度である。スタンダード等は、相関図と同様にシラバスの冒頭に掲載されており、大学側の周知方法では、これらと相関図とで違いがないはずである。しかし結果としてスタンダード等は相関図よりも認知度が低い。この違いの原因として考えられるのは、相関図の視覚的インパクトである。シラバスに掲載するスタンダード等の情報についても、図表化するなど、視覚的に訴える示し方を考える必要があるかもしれない。

#### 4-3. 履修計画を立てる際の判断基準

問8～問10では、学生が履修計画を立てる際の判断材料に焦点を絞っている。問8では履修計画を立てる際に依拠する情報、問9では履修計画を立てる際によむシラバスの項目について回答を求めた（複数回答可）。さらに問10では、「全学共通科目の授業を選ぶ際に、どういった点が選択の決め手になりますか」という問いを立てた（複数回答可）。

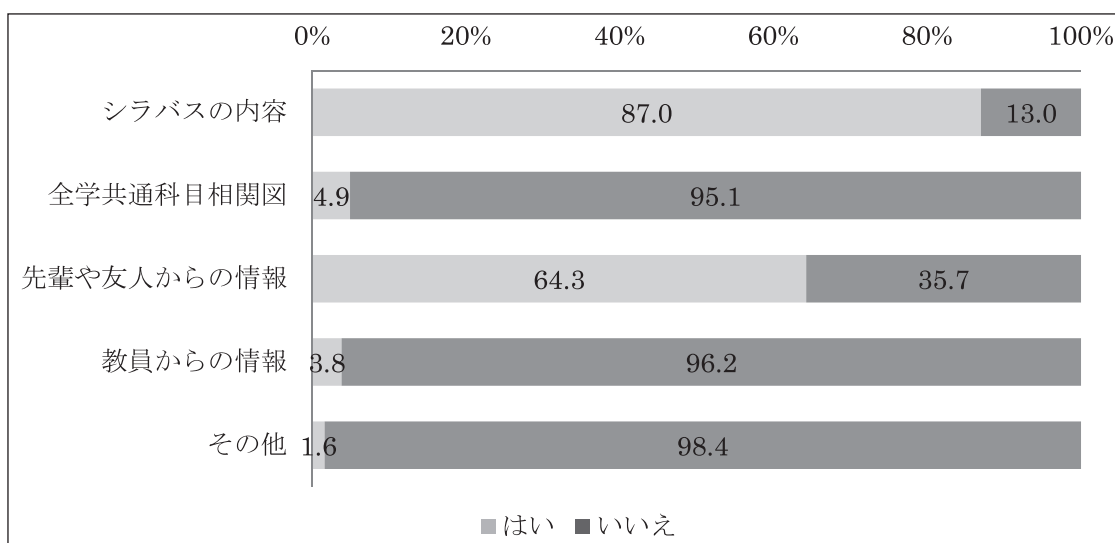


図8 問8の回答 (履修計画を立てる際に依拠する情報)

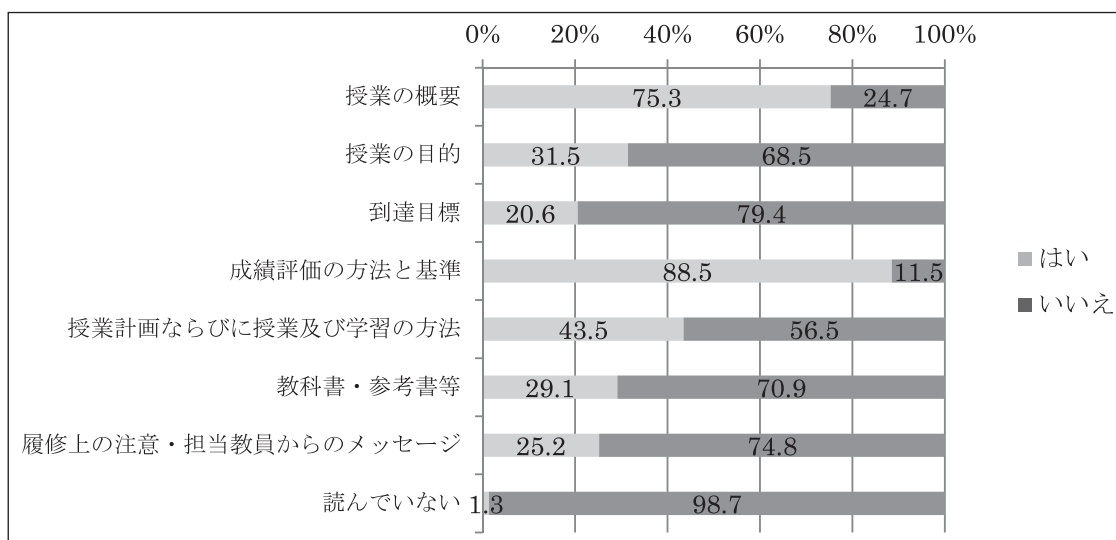


図9 問9の回答（履修計画を立てる際に読むシラバスの項目）

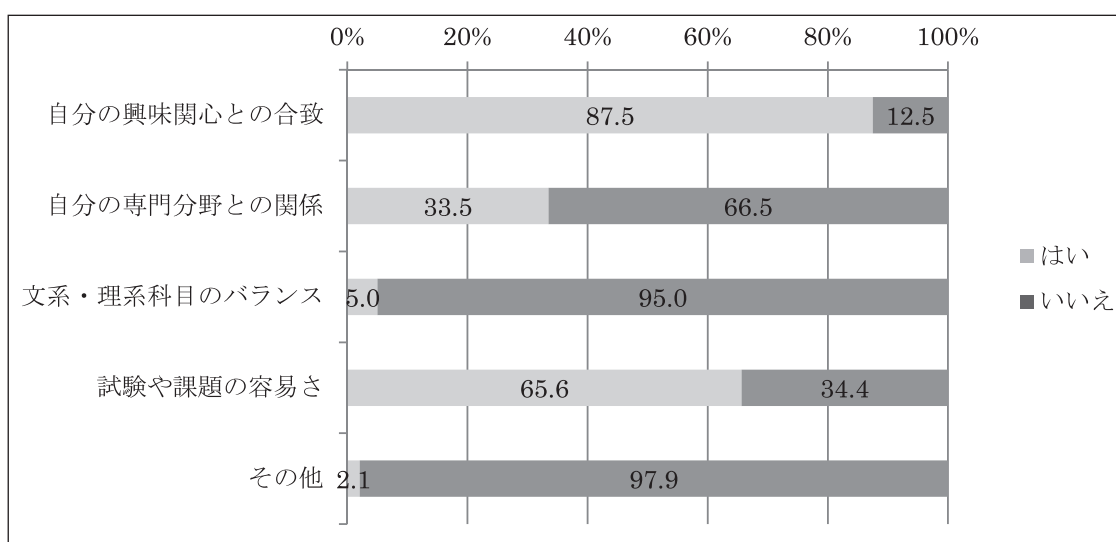


図10 問10の回答（授業を選ぶ際の決め手）

問8から、履修計画を立てる際にシラバスが参照されているが、相関図やスタンダードには関心が向いていないことが分かる。そして問9からは、シラバスのうち「授業の概要」と「成績評価の方法と基準」がよく参照されていることが見て取れる。この調査の企画段階において、ワーキンググループの議論の中で「そもそも学生はシラバスを読んでいないのではないか」という疑問が出ていたが、学生は部分的にはあれ、シラバスをきちんと読んでいるようである。また問10からは、授業選択の際、興味関心から選んではいるが、「文系・理系のバランス」がほとんど考慮されていないことが分かる。学生が単に試験や課題の容易さだけに着目するのではなく、自分の興味関心に従って授業を選択していることは望ましいことではあるが、興味関心の射程が自分の専門分野に近いところを超えていない、ということがあるのかもしれない。

#### 4-4. 専門科目に対する全学共通科目の有用性、授業相互の関連づけ

問11では、「全学共通教育で学んだ内容は、学部開設専門科目を履修する上で役に立っていますか」という問いを立て、「役に立っている」、「どちらとも言えない」、「役に立っていない」という三択で回答を求めた。問12では「ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることができるか」と問い、「よくある」、「ときどきある」、「ない」の三択で答えてもらった。問12は、学生各人が全学共通教育の授業において修得した知識を相互に関連づけることができているかどうか調べるための質問項目である。

問11では、「どちらとも言えない」の割合が非常に高くなっているが、これは回答者のほとんどが1年生であることに関連していると思われる。すなわち、1年生の段階では学部開設の専門科目を履修する機会はまだ十分ではなく、全学共通科目がそれに対して有用であるかどうか、判断がつけられないと考える学生が多いのではないかと推察される。

問12の回答から、8割弱の学生が授業相互の関連付けを行っていると考えている（そのうち、関連付けの頻度が高いのは12%）ことが分かる。相関図以外では特別な促しをしていないことを考えると、高い数値といえるのではないかと推察される。具体的にどのような関連付けを行っているのか、踏み込んだ調査をすれば、学生から見た関連付けの特徴が見えるかもしれない。

問12の結果と問1の結果とをクロス集計すると、相関図を知っている学生はある授業の内容を別の授業の内容と関連付けて考えている傾向が確認できる(表3参照)。このクロス集計のデータからも、相関図は学生の役に立っているということができよう。

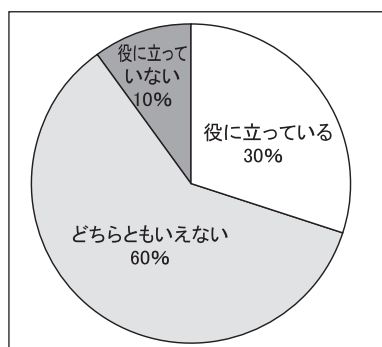


図11 問11回答  
(全学共通科目の有用性)

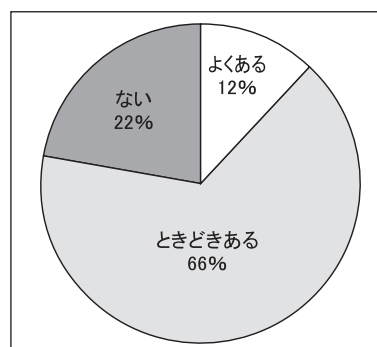


図12 問12の回答  
(授業相互の関連付け)

表3 問1と問12のクロス集計（「相関図の認知度」と「授業相互の関連を意識すること」との関係

問1. 全学共通科目相関図を知っていますか。	問12. ある授業の学習内容について、別の授業の学習内容と関連付けて考えることができますか。			
	よくある	ときどきある	ない	合計 (N)
知っており、参考に使っている	18.4	73.0	8.6	100.0 (185)
知っているが、参考に使っていない	10.1	67.7	22.2	100.0 (297)
知らない	10.9	61.2	28.0	100.0 (322)

## 5. 来年度のアンケートの改善点

今回の調査は、相関図の認知度に関する調査としては最初のものであり、今回のアンケート結果の分析に基づいて、質問項目の設定や選択項目の設定についても検討を行う必要がある。

まず問3、問7、問11では、半数以上が「どちらとも言えない」の項目を選択しており、安易に選択された可能性が高い。アンケートの精度を上げるために選択肢を3項目から4項目にするなどの工夫が必要であろう。

問11は、低学年に対する問いとしては適切ではないので削除する。学部開設科目に対する全学共通科目の有用性を調べるためには、たとえば4年生を対象とした調査を別に行うなどの方法が考えられる。この点について、最善の方法は何か考える必要がある。

また本稿では詳しく取り上げなかったが、問8（履修計画を立てる際に依拠する情報）、問11（授業を選択する際の決め手）において、「その他」を選択した回答者には、自由記述欄への記入を求めた。来年度は、この記述を精査して、加えるべき項目があるかどうか検討する。

そのほか、回答者の学部間バランスをいかに確保するか、アンケート実施時期は後期が妥当か、といった問題についても検討が必要であろう。これらのことについては、ワーキンググループで、今後改めて議論を行う予定である。

## 6. おわりに

以上の分析から、相関図は、学生が履修計画を立てる際の判断基準とはなっていないが、学問基礎科目相互の関連性を理解する上では役に立つ可能性が高いということを読み取ることができる。しかし、初年度とはいえ、肝心の浸透度が低いという現状に対しては、次年度に向けて対策を立てる必要がある。1年生における相関図の認知度を100%に近づけるための具体的な方法としては、大学入門ゼミにおける周知なども考えられるが、当面は、相関図の意義について教員の間で共通の認識を持つことが重要であろう。

### 注

- 1) アンケート結果の集計、分析において、キャリア支援センターの藤本佳奈助教にご協力いただいた。ここに記して感謝の意を表したい。

### 参考文献

中谷博幸ほか（2013）「学問基礎科目の充実と共通教育コーディネーターの役割」香川大学大学教育開発センター編『香川大学教育研究』第10号、63-76頁